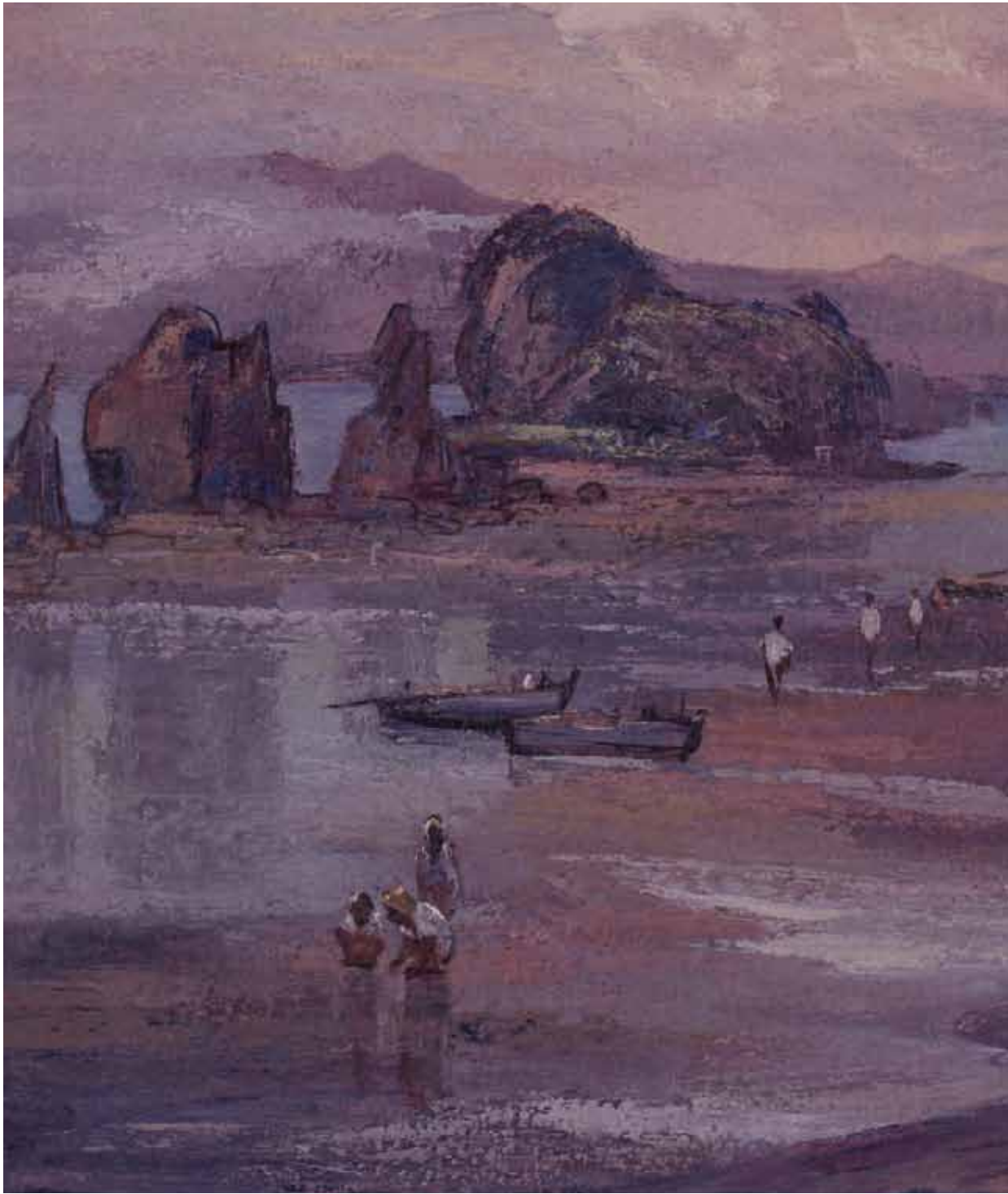


130

2020 AUTUMN

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 1

赤松麟作《串本》(部分)
昭和13(1938)年
油彩・カンバス
60.6×80.9cm

赤松麟作展へのいざない

廣瀬 就久(主任学芸員)

赤松麟作(1878-1953)は、津山市に生まれました。1883年に家族とともに大阪に移り、山内愚僊^{やまのうちげん}に油絵を学びます。97年に東京美術学校西洋画科に入学して、黒田清輝に師事します。99年に卒業し、1901年の第6回白馬会展に、《夜汽車》(東京藝術大学蔵)[図1]を出品しました。この作品は白馬会賞を受賞し、東京美術学校買上となります。三重県立第一中学校、和歌山県立新宮中学校教師を経て、04年に大阪朝日新聞社の挿絵記者として入社しました。08年には赤松洋画塾を開設し、同年より文展に出品します。光風会会員、第1回大阪市展審査員となり、関西油彩画界の指導者として尽力しました。

《夜汽車》を出品した白馬会は、黒田清輝たちが中心として結成された美術団体です。夜行列車の客室と車外の風景を描いた作品で、夜明け前の時間でしょうか。乗客の様々な仕草が見どころです。

大阪朝日新聞社には17年まで勤務します。時事の紙面に挿絵を掲載するほか、同僚である野田九浦^{きゅうほ}ならびに水島爾保布^{に お う}、幡恒春^{つねはる}、永井瓢齋^{ひょうさい}とともに、同紙連載企画「阪神名勝図会」を担当しました。この企画をもとに、金尾文淵堂^{かな お ぶん えん どう}が16年に『阪神名勝図繪』を出版します。『阪神名勝図繪』のうち、四作家の作品を交えつつ、すべての赤松作品を紹介します。

このたびの展覧会では、風景画、また女性像、そして花と鳥を描いた絵画など、画題別に作品を取り上げます。風景画を最初に展示します。時間や季節のうつろいに着目した作品が多いです。師であった黒田がもたらした外光表現に適した題材であるのかもしれませんが。東京美術学校を出て間もない頃に《水鳥のいる風景》(岡山県立美術館蔵 1903)を描きました。のちには《三保の松原(A)》(岡山県立美術館蔵 1938)のように、印象派的な原色の筆触を並置した作品や、《霧の穂高》(岡山県立美術館蔵 1940)のように、伝統的な水墨画^ほに想を得た暈かしを表現した作品を手がけるなど、変化に富んだ風景画を制作します。

多数の人が描かれている風景画もあります。《鳩》(倉敷市立美術館蔵 1928)では、天王寺境内に多くの鳩が戯れるなか人々が集まり、《猿沢の池》(岡山県立美術館蔵 1948)では、猿沢の池と、興福寺南円堂前から三条通に下る坂に、多くの人々が小さく描かれます。

《三保の松原(A)》、《霧の穂高》とともに、第13回帝展に出品した《白糸の滝》(一般社団法人日本綿業倶楽部蔵 1932)[図2]は、大阪在住の赤松が遠方に旅行した時の記念であったでしょう。一方で、《猿沢の池》や《串本》(岡山県立美術館蔵 1938)[表紙に部分図掲載]は、関西圏内の行楽地であったのかもしれませんが。



(左)図1:《夜汽車》1901年 東京藝術大学蔵
(右)図2:《白糸の滝》1932年 一般社団法人日本綿業倶楽部蔵



図3:《静物》1930年 一般財団法人江原積善会理事長江原良貴蔵

続いて女性像を紹介します。東京美術学校在学時から、塾や学校で教師をしていた晩年まで、多くの裸婦を制作しました。大阪の実業家、岸本吉左衛門がパリで購入のうえ、1920年に大阪で公開したルノワール《すわる水浴の女》(石橋財団アーティゾン美術館[旧ブリヂストン美術館]蔵 1914)を、赤松は模写しています。その後《裸婦》(岡山県立美術館蔵 1927)などを制作しました。描かれる女性の姿は様々で、裸婦のほか舞妓の日本人、妃生の韓国人、そして姑娘の中国人が描かれます。赤松が描く日本の女性は洋服を着て、オペラを歌い、バレエを踊ります。赤松は五男三女に恵まれ、子どもたちはしばしば絵画に登場します。《友達》(岡山県立美術館蔵 1948)は晩年の作品ですが、年老いた父が若い娘たちを温かく見守る、慈愛に満ちた視線が感じられます。

画家は草花や果実、楽器、食器、書物などを配置したうえで静物画を制作します。赤松の場合、《静物》(一般財団法人江原積善会理事長江原良貴蔵 1930)[図3]が、現状では唯一の作品です。これに対して、瓶花そして屋外の花、鳥、そして動物が多く取り上げられました。《雀の群》(岡山県立美術館蔵 1930)や、松と鴛鴦を描いた《水鳥》(菅田株式会社蔵 1938)には、構図や筆致に日本画との関連が見いだせます。実際のところ赤松は、日本画の画材を利用して花や鳥、動物、そして風景を描きました。これら日本画も、比較のために紹介します。

赤松は文展や帝展などの公募展では、もっぱら油彩画を発表しました。日本画そして日本美術に関する赤松の文章は、今のところ確認できません。しかしながらこの展覧会で紹介するように、日本画と関連のある油彩画のほか、多くの日本画を制作しています。「赤松麟作還暦記念回顧展」(大阪市立美術館)の時に自ら出版した『麟作画集』(1939)には、おそらく太平洋戦争で失われたと考えられる、邸宅所蔵の襖絵や屏風が掲載されています。赤松麟作と日本美術の関係について、今後考える必要があるでしょう。

太平洋戦争における大阪大空襲、豊中空襲のため、多くの作品が失われたことは、まことに悔やまれます。上記日本画のほか、文部省美術展覧会などに出品された多くの油彩画は、残念ながら見ることはできません。戦後は木版画集『大阪三十六景』(岡山県立美術館蔵 1947)を出版しました。大阪に対する愛情が感じられます。木版画集出版の翌々年には、夏目漱石の小説による絵巻を多数手がけました。この展覧会には、《夏目漱石『草枕』より》(三重県立美術館蔵 1949)が出品されます。

1993年の「赤松麟作展」(大阪市立美術館)、2003~04年の「赤松麟作とその周辺」展(東京藝術大学大学美術館)に続く本展では、当館が所蔵する作品と、本県に所蔵される作品を生かしつつ、初期から晩年までの代表作を含めた、160点あまりを取り上げます。

【岡山の美術 特別展示】「赤松麟作 《夜汽車》から始まる画業」(2020年9月26日~11月3日)

コロナ禍で断たれたこと／繋がっていたこと

—博学連携編—

岡本 裕子(主任学芸員)

2月末から思いを持った人々とともに行なってきたことが、新型コロナウイルス感染症によって次々と断たれた。特に4～5月は、中止の連絡が次々に入ってきた。計画的・継続的に来館していた学校団体観覧の中止。そして、2005年度からスタートし今年度16回目を迎えるはずだった夏休み小学生鑑賞教室(以下、小学生鑑賞教室)の中止。

ところが、学校が短い夏休みに入る直前の7月下旬から、2学期に美術館学習を計画したいという連絡が次々に入るようになった。そのほとんどの学校が、泊を伴った校外行事や社会科見学が中止となり、美術館へ目が向いたということらしい。安全と安心を確保しながら、児童生徒の充実した美術館学習を実施するためには、学校と美術館の事前打合せが一層重要になると考えた。コロナ以前は、電話、もしくは下見を兼ねた一回の打合せであったが、今回は一回目は学校で、二回目は美術館で、ともに双方が顔を合わせて打合せを行うこととした。また、従来のプログラム運用では密を防ぎきれない場面が出てくると判断し、プログラム運用を一部変更した。そして、変則的なプログラム運用を補完するためには、学校で行う事前美術館学習も打合せとともに重要であると考えた。

まずは学校での打合せ——安全と安心を確保する方法と児童生徒が主体的に作品と向き合うことができるプログラムについて美術館から提案し、児童生徒の実態に即した美術館学習にするために先生方と意見交換しながらプログラムをブラッシュアップした。その過程で、事前美術館学習の必要性に先生方が気づかれる。次に美術館での打合せ——展示室も含め美術館内を実際に歩きながら、美術館学習当日の導線やプログラム内容の最終チェックを学校と美術館で行う。コロナ禍でのこうした学校とのやり取りをとおして、ともに美術館学習をつくっていかうという積極的な姿勢をどの先生方からも強く感じる。

2学期に美術館学習を希望された多くの先生が、「展示物を見て歩くのではなく、鑑賞の仕方・作品の見方を子どもたちに体験させたい。コロナ禍でも対話を用いた鑑賞コースを実施してもらえるだろうか」とのお問合せであった。学校に打合せに伺うと、2006年に制作した「国吉鑑賞ガイド」のコピーを大事に出され、「コロナ禍で社会科見学が中止になった時、若いころ使った国吉カードが頭をよぎった。学校で国吉カードを楽しんだ後、美術館で本物体験ができるといいなと思って電話をしたのよ」と言われた先生。また、2017年に制作した「アートカード100<活用ガイド>」を手を持って待っていてくださった先生は、「コロナ禍で校外学習が中止になった時、教員研修でアートカード100を使ってとても楽しかったことを思い出した。アートカード100を学校で使った後、美術館で本物を見ることができるといいなと思って電話をしたのよ」と言われた。コロナ禍で美術館学習を希望された先生は「自身のよき体験に基づいた思い」を持って美術館を校外学習の場を選択されているように感じる。十数年かけて種をまき続けてきたことが、そこここで実っている姿を実感することができ素直に嬉しい。「国吉カード」と「アートカード100」は、今年度中止となった小学生鑑賞教室に携わっている先生を中心としたメンバーと美術館がともに制作した美術館教育素材である。一見コロナ禍で様々なことが断たれたように感じていたが、実は多様な形で繋がっていたということを思うと希望が見えてくる。

反面、依頼があったすべての学校を受入れることができたわけではないということも忘れてはいけない。コロナ以前では受入れていたケースでも、展示スペース、学校の滞在時間、来館者数等によっては、安心と安全の確保が難しいと判断し、苦渋の選択で実施できなかった学校もあった。コロナ禍であっても、児童生徒が美術や美術作品、美術館と出会う機会を保障できるよう学校とともに知恵を出し合っていきたい。



2019年2月/学校団体観覧(中学生)



2019年6月/学校団体観覧(小学生)



2019年8月/小学生鑑賞教室(5年生の部)

え 画の歓び

古川 文子(学芸員)



猛暑の夏が過ぎ、風に揺れる芙蓉の花や菊の香に季節の移ろいを感じる頃です。本来なら芸術の秋本番へと向かう時期ですが、今年は新型コロナウイルスの影響で、各地の展覧会スケジュールにも様々な変更が生じています。そこで今回は、日頃お世話になっている県内2館の最新情報をお知らせします。

先ず、井原市の華鶴大塚美術館で10月から開会の「遠距離深夜行-painting exhibition 児玉知己展」をご紹介します。1982年倉敷市生まれの児玉知己さんは、植物を思わせる無数のモチーフが画面に揺らぎと生命感を与える大作《星の日》で第4回「I氏賞」大賞を受賞しました。第3回大賞の松井えり菜さんとの「I氏賞受賞作家展 ふたりは“絵画する”」(2013)も記憶に鮮やかです。また「美作三湯芸術温度」(2019-20)でのレトロな温泉宿の佇まいを活かした展示には、時の流れに寄り添う制作姿勢が見事に体現されていました。美術館全体での空間表現に取り組んだ個展に期待が高まります。《宇宙的秩序》は自然に通底する感覚を意識し描いた最新作です。

続いて倉敷市児島の野崎家塩業歴史館では、館蔵品による「小田海僊展」を開催中です。小田海僊(1785-1862)は、山口県に生まれ主に京都で活躍した江戸時代後期の画家です。野崎家には、海僊が天保8(1837)年に当地を訪れ制作した作品約20点が伝わっています。数か月の滞在中に、得意の人物に花鳥、山水と幅広い画題を豊富な知識で手がけ、精緻な着色から紙や墨の性質を熟知した水墨表現まで、技量の充実ぶりがうかがえます。さらに、右図5の菊花の動きのある筆致などには、前述の《宇宙的秩序》とも共通する生命感があります。彼らの作品からは、外なる自然と内なる自然の融合により描くことの歓びが、時代を越えて伝わってきます。野崎家では2年後に、児玉さんの個展も企画されています。

両館とも、建築や庭園に四季の風情を体感できる場所です。明るい秋の光のなかに身を置いて深呼吸する感覚で、いつも近くに在る施設や作品に親しんでいただければと思います。



3



4



5-1



5-2

- 1. 2. 児玉知己《宇宙的秩序》
2020年 綿布、アクリル
- 3. 「美作三湯芸術温度」
展示風景 2019-20年
(会場:湯快感 花やしき)
- 4. 小田海僊《水墨花鳥図》
1837年 紙本墨画淡彩
6幅のうち「芙蓉鶯図」
- 5-1. 小田海僊《着色花鳥図》
1837年 綿本着色
6幅のうち「菊鶯図」
- 5-2. 「菊鶯図」(部分)

【展覧会情報】「遠距離深夜行-painting exhibition 児玉知己展」(会場:華鶴大塚美術館 会期:2020年10月10日~11月23日)

「小田海僊展」(会場:野崎家塩業歴史館 会期:2020年9月10日~11月23日)

新収蔵品紹介

File 17

虫明焼
福富 幸(学芸課長)



黒井千左《彩色象嵌線文大皿》平成時代(21世紀)

虫明焼は江戸時代中期に岡山藩筆頭家老伊木家のお庭焼きとして築かれて以後、断続的に今日まで続く焼き物です。江戸末期～明治初期には京都から清風与平や宮川香山が来窯したことも知られ、京焼風の薄造りで上品な茶道具が人気です。当館には香山の虫明来窯を証する寄託作品や昭和期に廃業中であつた虫明焼を復興させた岡本英山の《五節句茶碗》などが収蔵されています。

このたび寄贈を受けた作品は、親子で県指定重要文化財保持者となつた黒井一楽[大正3(1914)年～平成8(1996)年]と息子千左[昭和20(1945)年～]の作品です。香山の弟子であつた森香州の弟子横山香室に師事したのが一楽で、一楽の家系が窯

の火を守り続け、現在、県展や日本伝統工芸展などで活躍しているところで、千左は高等学校卒業後、京都市工芸指導所に学び、その後、一楽について作陶を始めましたが、伝統的な虫明焼を継承するにとどまらず、現代陶としての虫明焼を追求、独創的な作品づくりにこだわっています。新収蔵となつた3点もこれまでの虫明焼とは一線を画す色彩と技法によるもので、施された文様の緻密さ、象嵌の切れの良さに千左の並々ならぬ強い思いを感じます。英山や一楽の伝統的な虫明焼と見比べながら、オリジナリティの創出という美術の自由さを楽しんでいただければと思います。



黒井千左《コバルト鉄釉線文灰釉壺》平成時代(21世紀)



黒井一楽《喰籠》昭和時代(20世紀)

展覧会スケジュール

10月
October

9月26日|土| - 11月3日|火・祝|

【岡山の美術展】赤松麟作

赤松麟作(1878-1953)は津山市に生まれ、83年に大阪へ転居します。東京美術学校西洋画科を卒業したのち、1901年の第6回白馬会展に、《夜汽車》(東京藝術大学蔵)を出品して高い評価を得ました。04年には帰阪して同地の画壇で終生活躍します。風俗や物語の絵画、風景画、また花と鳥を描いた絵画、そして裸婦など、当館所蔵品を生かしつつ、国内にある代表作を取り上げる、17年ぶりの回顧展です。

10月3日|土| 14:00-15:30

記念講演会 「赤松麟作と大阪の近代洋画」

講師 熊田司氏(美術史家・和歌山県立近代美術館前館長)
会場 2階ホール(当日先着105名) ※無料

10月11日|日| 13:30-16:00

(基調講演13:30-14:30、特別対談14:40-16:00)

基調講演 「備前焼の魅力と作風の展開—桃山から現代まで—」

講師 唐澤昌宏氏(国立工芸館長・本展監修者)

特別対談

講師 隠崎隆一氏(出品作家・岡山県重要無形文化財保持者)、
唐澤昌宏氏

会場 2階ホール(定員100名) ※無料、要申込

10月10日|土| - 11月8日|日|

【特別展】

The 備前一土と炎から生まれる造形美—

「備前焼」は、釉薬を施さず焼締めるやきもので、焼成によって生まれる変化に富んだ窯変が見どころです。本展は国立工芸館長唐澤昌宏氏の監修により選りすぐられた作品と本拠地ならではの古備前や細工物をプラスし、多様な備前焼の魅力を紹介いたします。

10月17日|土| 14:00-15:30

美術館講座 「赤松麟作の歩み」

講師 廣瀬就久(主任学芸員)

会場 講義室(当日先着35名) ※無料

11月
November

11月8日|日| - 12月20日|日|

【岡山の美術展】

第10回 I氏賞受賞作家展

金孝妍・小林正秀・中原幸治・吉行鮎子

【岡山の美術展】

もっと伝統工芸 木工芸 伝統工芸前夜

11月13日|金| - 11月29日|日|

【特別展】第67回 日本伝統工芸展岡山展

12月
December

12月5日|土| - 2021年1月31日|日|

【特別展】マイセン動物園展

ヨーロッパで初めて硬質磁器の製造に成功したマイセン窯は、設立以来300年以上にわたり西洋磁器のトップブランドとして高い評価を得ています。本展では、最高級の芸術性と品質を誇るマイセンの作品群から、動物をモチーフにした愛らしく躍動感に富んだ作品をご紹介します。

*この他にも多数イベントの開催を予定しております。
詳細は岡山県立美術館公式HPにてご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>



収蔵品の紹介 Vol. 1

赤松麟作(串本)
昭和13(1938)年 油彩・カンバス 60.6×80.9cm

串本の奇岩として知られる橋杭岩周辺の風景です。大阪に暮らす赤松にとって、南紀は関西圏内の行楽地でした。浜辺で遊ぶ人々が点景として描かれていて、干潟に橋杭岩の影が映ります。かすめる筆致が干潟の様相をよく伝えます。全体は紫色でまとめられた画面ですが、照り返しや影の部分の色が多彩です。(廣瀬)

コロナ禍の美術館

守安 収

只今、さまざまな新型コロナ感染予防対策を講じつつ、延期していた『高畑勲展』を開催中。とりわけ三密防止の入館日時予約制は、いつでも気が向いた時にふらっと訪れることができるという美術館のいつもの在り方とは真逆です。学校教育とは違って、いつでもスタートでき、自分のペースで楽しむことのできる魅力的な空間を提供するのが従来型。それが観覧希望者にとっては手続きが煩雑となり、スマホやパソコンが苦手な高齢の方からの「われわれを見捨てるのか」という厳しい声も届きました。大勢の来館を願う館としては人数制限による来館者数の減少を招くだけでなく、何段階にもわたる受け入れ作業に従事する人員や機器を手当せざるを得ません。しかし安心安全に優先するものはなく、現状では適切な代替手段はありません。その代わりに、来館者からは「落ち着いてゆっくり鑑賞できた」という圧倒的多数の高評価をいただきました。大都市圏とは異なり、地方公立館が大混雑という現象は何年かに1度あるかなしかですが、今回は、従来通りでは済ますことのできないこれからの美術館の使命と運営方法を考えさせられました。まだまだ模索は続きます。▼まずはコロナの禍中にもかかわらずご来館下さった方々にお礼を、そして持ち場と作業量を増やしながら展覧会運営の実務に携わった関係者各位の頑張りにも感謝します。「いのち」を預かる医療従事者と同列に扱うのはおそれ多いことですが、美術館もそこで働く人たちも「こころ」豊かに生きる「たのしみ」を最大限サービスできるよう取り組んでいます。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 岡山後楽園バス「岡山県立美術館」下車すぐ
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ
開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)
休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

*一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようをお願いいたします。

編集後記

三井麻央

みなさんお気づきでしょうか。この『美術館ニュース』130号からは紙面をリニューアルし、表紙でも岡山県立美術館の収蔵品をご紹介します。この『美術館ニュース』、当館が開館して以来30年以上にわたり年4回休みなく発行されていますが、それでもご紹介できていない作品はまだたくさんあるんです。見落としがちな作品の細部や新収蔵作品など、こんな作品もあったんだ、とお楽しみいただければ幸いです。今号の表紙を飾る赤松麟作の作品は「赤松麟作展」の会期中、展覧会場でも実際にご覧いただけますよ。